
キュアグラス ~ただ雑草のように~

プシェミスル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キュアグラス ～ただ雑草のように～

【NZコード】

N5548Z

【作者名】

プシュミスル

【あらすじ】

あてもなく、たださすらいながら戦い続ける一人の女がいた。人から好かれず、また彼女も好かれようとはしない。彼女は一体何を望むのだろうか。その名はキュアグラス。雑草といつ名のプリキュア・・・。

プロローグ

「わ・・・わかりましたあーもひ、一度としませんから命だけはあ
うーーー。」

「本當ね。もし今度繰り返したなら、その命を……。」

「ほ・・・本当にですつてば～～～！～～～！」

私が今問いただしているのは、あるスーパー・マーケットから万引きをしようとした少年だ。偶然それを見た私は少年に『ある程度』制裁を加え、万引きを未然に防いだ。彼も二度としないと誓った。本当かどうかは疑わしいが・・・。

私の名前は芝草秋香。^{しばくさ しあうか}歳は15、中3だ。我が家は転勤が多い家で、ほぼ1年ごとに転校を繰り返している。だから私には友人がいない。友人をつくる気もしない。親から友人をつくれつくれと言われているが、正直うつとうしい。つくってもすぐに疎遠になってしまつのなら、そんなものはいらない。

そんな私は現在、四つ葉町といつ町に住んでいる。別名クローバータウンと呼ばれているそうだが、私にはどうでもいい事だ。

今日は日曜日、私はとぼとぼと町を散策している。でかい怪物が跋扈している以外は何とも平穏な町だ。・・・ん? でかい怪物?

芝草 秋香 (しばくさ しゅうか)

1996年7月21日生 15歳

両親と自分の3人家族

明るくて社交的な他のプリキュアたちと違い、あくまで孤独を貫き、誰とも関わろうとしない少女。口数も少なく、つい毒を吐いて周りに嫌悪感を与える。

プロローグ（後書き）

四つ葉町で出会った4人のプリキュア。キュアグラスとして共に戦つたものの、秋香は彼女たちとは関わろうとしない。己は雑草、雑草なのだから。

次回「孤高」 奴とは、絶対に関わらないほうがよい。

四つ葉町を襲つてゐる巨大な怪物。それに立ち向かつてゐるのは、私と同じ年代であろう4人の女。その奇怪な容姿。あの女たちも私と同じ『プリキュア』なの・・・・かな。

Г Н Н Н Н Н Н Н Н ۱ ۲ ۳ ۴ ۵ ۶ ۷ ۸ ۹ ۰

巨大なツインテールをした金髪の女が、怪物に向かって飛び膝蹴りをきます。それに続いて他の女たちも攻撃する。

『プリキュア・クアドブル・キーナンツツク！！！！』

4人の息の合つたキックが怪物にダメージを与える。だけど怪物にはさほど効果は無いみたいだ。逆にその圧倒的な力で女たちを圧倒する。

・・・・つたく、せつかくの日曜日をこんなつまらない事で潰され
ないで頂戴。

『チエンジ・ザ・キュアグラス!』

服のポケットから、変身アイテム『グラス・ロッド』を出して、私はあいつらと同じプリキュアへと変身する。

『私は無限の生命の証、キュアグラス！！』

・・・雑草とは塗つても塗つても生えてくるもの。だから無限の生

命なのだ。

「・・・・・・・・ツツ！――」

バツシ――――――――――

「ウオオオオオオオ――――！」

私は無言で怪物にパンチをお見舞いしてやる。急所に当たったのか、怪物が地面に倒れのた打ち回る。

「た・・・・・助かったあ・・・・・。」

「もたもたするな、もう立ち上がりつてるだ。」

「え？」

ベシッツ――――――

警告した時にはもう遅かった。怪物はもう立ち上がり、ツインテールの女を殴り飛ばした。

「ピーチ！大丈夫！？」

へそを出した女と赤い服の女がピーチと呼ばれた女に駆け寄る。隙を見せたらだめだつてのに。

「私がやるしかないか。」

私はロッドを装備し、自らの技を発動させる。

『地上に生える無数の草の魂よ、奴にからみつき、動きを封じよ。』

『プリキュア・グリーングラス・ロープ!』

ロッドの先から草で編んだロープが放たれ、怪物の体をがんじがらめにし、動きを封じさせる。

「動きが止まつた……？」

「何もたついてるの？止めを刺せ。」

「……ひ、うん……」

ピーチとその他の連中も、必殺技を繰り出した。

「クローバーボックスよ！私たちに力を貸して……！」

『プリキュアフォーメーション－レディ……ゴー……』

「ハピネスリーフ、パイン！」

「プラスワン、フレアーリーフ、ベリー……！」

「プラスワン、ヒスボワールリーフ、ピーチ……！」

「プラスワン、ラブリーーリーフ！－－！」

『ラッキークローバー・グランドフィナーレ……』

大きなクローバーマークが怪物を結晶で封じめる。

怪物は徐々に弱っていく、やがて浄化されたのか消滅した。

おいおい、もう廻過ぎじゃない。1日の半分が終わつた。つまんな
い事に關わるんじやなかつた。や、散歩の続きとこいつかな。

「待つて！」

変身を解き、元に戻った奴らの1人、キャンディの包みみみたいな髪型をした子が来る。

「さつきはありがとう。あなたがいなかつたらどうなつてたか。あ、あなたもプリキュアなの？」

• • • • • • • •

私は無視して散歩に向かう。——いつらを相手する道理なんて無いから。

「私、桃園ラブ！あなたは？」

くどいなあ。私は歩んでいた足を止め、後に振り返る。そして・・・

「ツー！」

「バキイツツー！」

「タツハアアーーー！」

ラブと名乗った子の顔面を、思いつきり殴り飛ばした。

「ラブー！」

「ラブちゃんー！」

「ラブ、大丈夫ーーー？」

「うーーーうん何とかーーー。」

「ちょっとあんたー何て事するのよーーー！」

「今すぐラブに謝つてーーー！」

青い髪をしたモデル風の子と藍色の髪の子が突つかかってきた。面倒な連中だ。

「私、馴れ馴れしい人間は嫌いなの。だから殴ったの。」

「なーーー何よその態度ーーー！」

「初対面の人間にそこまで親しくする義理は無いわ。そりでしょ。」

「

「…………あんた…………！」

「…………。」

言いたい事は言つた。呆気にとられている奴らを背に、私は散歩の
続きをに入る。無駄な体力を使つた。

「…………何なのよあいつ、人を助けておいてあの態度は…………！」

「それに一言も謝らないでおいて。今度合つたら…………。」

「ラブちゃん、鼻血が！」

「…………」

明くる月曜日、私は今度転入する『公立四つ葉中学校』の門をくぐ
つた。クラスは3年の4組目。

「今日からこの4組に転入した、芝草秋香さんだ。」

紹介をされ、席につかせられる。クラスメートから質問はされたが、
適当にあしらつてやつた。

「転人生？」

「3年の芝草秋香さんですって。」

「どんな人だろ？ ねえせつな、見に行つてみようよー。」

「ちょ、ちょっとラブ待つて！」

「あ、あの人かな？・・・・て。」

「あ・・・・・・あいつー昨日ラブを殴り飛ばした・・・・！」

「え・・・・そうだけ？ 顔良く見ていなかつたからわからんないなあ。」

「ラブ、あまりあいつには関わらないほうがいいわ。」

「そ・・・・そとかなあ。」

「顔も全然笑つていないし、一言もしゃべらつとしないじゃない。放つておきましょ。」

「で・・・・でも・・・・。」

同じプリキュアなのにラブは言わなかつたが、せつなに引っ張られ、言えなかつた。

「どうせまた転校するんだもの。」

自分に言い聞かせるように、私はつぶやいた。

孤高（後書き）

学校に転入した秋香に関わるうつむくラブ。軽くあしらってやる秋香。

いまの彼女には、ラブはしつこく付きまとつシラフマニアしかなかつた。

次回「憎い奴」しかし、それでも女は興味を持たれる。

憎い奴

ポカポカポカ・・・・

昼休みになつた。私は学校の校庭の木陰でゆつくり昼寝だ。ここならば誰も来る事は無いだらうし、落ち着いて眠れる。

クー・・・クー――・・・・

今日もいい天氣だ。毎日こんな日が続くといいが・・・。

「・・・・・セセーん・・・・・・」

?

「・・・・・ばくセセーん。」

???

「芝草セーん!」

・・・何だ昨日私がぶん殴つた、ラブ・・・とか言つ子だつたつけ?

「何しに來たの?」

「芝草さんが一人でどこかに行くから、つい心配になつちゃつて、ついて來たの。」

「戻つて。」

「どうして？」

「私は今眞寝中なの。邪魔しないで。」

「でも……。」

「戻つて。」

「…………うふ。」

「…………。」

「うつむいて、ラブはとまどとまどと戻つてこつた。」

「眞寝の続きね。」

私は再び眠りこけた。

「…………。」

「どうしたのラブ？ ボーつとして。」

「…………何でもない。」

「…………。」

今のラブには、せつなという子の言葉も入ってこないようだ。

放課後になつた。私はクラブ活動を何もしていない。ただまっすぐ家路につく。

「…………ふう。」

私はため息をつぐ。その時だつた。

「芝草さんー」

またラブが来た。今日はやたらと絡んでくるな。

「帰りにドーナツ食べていかない？」

「いらない。」

「そんなつれない事言わないで行こうよ。」

「くどいわねー。いらないわー！」

「嫌だと言つても連れて行きます！」

一体どこからこんな力が出るのか。ラブは私を引きずつて行つた。抵抗を試みたがラブの力が上だつた。

たどり着いたのは1台のバンの前だった。屋台のドーナツショップか。ふうん、案外小洒落たお店ね。あら？先客がいるみたい。

「ラブちゃん？それにその人・・・。」

「あーっ！あんた昨日ラブを殴った人じゃない！！！」

バンの前の簡易テーブルに座っていたのは、昨日怪物と戦っていた子たちだった。まずいわね、こいつらと関わると面倒な事になるわ。さっさと退散しましょ。

「この人も、ドーナツが食べたいって言つから仕方なく連れてきちゃつた。」

「ちょっと…私そんな事一言も言つてないわ…！」

「…帰らせてもらうわ。」

退散しようとしたが、すぐにラブに捕まつた。抵抗しようとしたけれど無駄だった。諦めて私は相手する事にした。はあ…帰りたい。

テーブルの上に5人前のドーナツが並べられた。皆おいしそうに食べている。私は全く手を付けない。付ける気もしない。

「どうしたの芝草さん。食べないの？」

「食べない。」

「おこしこのー。」

「おこしくても。」

「食べたら幸せになるのに。」

「もう充分幸せよ。」

「嘘だよ、だつて顔が笑つてないもん。」

「幸せだつたら笑つてなきやいけないの？」

「・・・・・・・」

ラブは黙り込む。やつと諦めてくれたか。

「ねえ、#芝草・・さん？」

おとなしそうな茶色の短髪の子が聞いてきた。仕方なく相手してやる。

「あなたの名前は何て書ひの？」

「・・・・秋香。#芝草秋香。」

「秋香さん・・・いい名前ね。」

「褒めても何も出ないわ。」

「私は祈里。山吹祈里です。」

「覚えておくれわ。」

「歳は?」

「15。中3。」

「じゃあ私たちより1個上級生なのね。」

「そうね。」

「そこまで言つと、今度は綺麗なモ^モデル風の長髪の子が質問してくる。」

「#芝秋香さんだったわね。私は蒼乃美希、よろしくね。」

「・・・。」

「家族は?」

「両親と私。」

「友達は?」

「いらない。」

「い、いらなーいって・・・。」

「友達なんて、つくつてもいすれは嫌いあうか、忘却の彼方よ。」
「・・・昨日私たちが戦っている時に、あなたが援護してくれた。
どうやらあなたもプリキュアみたいね。あなたの力、かなりのもの
だと思つの。」

「それが？」

「私たちに協力してくれない？」

「断る。」

「どうして？」

「馴れ合つのは嫌いだから。」

「な、馴れ合つって・・・。」

「それ」「？」

「それに？」

「1人のほうが、かえつて好都合だから。」

「・・・。」

「やつ。」

「…………ねえ、秋香さん。」

「何?」

「昨日から見ているけど。あなたって、氷みたいな人ね。」

「氷?」

「そう、温かみの無い冷え切った氷のようだわ。」

「…………違つわ。私は雑草、ビニにでも生えてビニにでも邪魔になる雑草よ。」

「雑草?」

「やつ、雑草。」

…………

そこで会話は途切れた。

「もういいでしょ、私帰るわ。忙しいから。」

ドーナツに全く手を付けず、私は家路につく。

数百m離れた時、ラブがこっちに向かつて大きな声を出した。

「秋香あーん!困った事があつたらいつでも来ていいからねーー

「…………」

困った事なんて無い。

ようやく家に戻れた。日はもう沈んでいた。

ガチャリ

「ただいま。」

家に入つても誰もいない。両親は共働きで、いつも帰つて来るのが遅い。

モグモグ

夕飯はいつも1人だ。静寂の中での夕飯は落ち着く。その後お風呂を入れて、洗濯物をたたんで、お風呂に入つて、寝る。これが私の日課だ。

ＺＺＺＺＺＺＺＺ・・・ＺＺＺＺＺＺＺ

明日も学校だ。寝坊すると悪いからさつと寝よ。

憎い奴（後書き）

相変わらず突つかかってくらるラブ。何故彼女はそこまで過剰なのだ
る？？

そして何故か秋香は、他の子たちの面前に立たされていた。苛立ち
ながら。。。

次回「紹介」もつ何遍も言つてきた。

紹介

ワイワイガヤガヤ・・・

今日も一日が終わり、放課後になつた。私がこの学校に来て数週間、最初のうちは物珍しさにしゃべつてきた人間が多かつたが、今では誰一人として近寄る人間はいない。むしろ煙たがられているようにも感じる。それでいい、私にはそれで十分だ。草とは本来煙たがれるものだ。

学校内やグラウンドでは部活動が行われている。私はどこにも所属していない。部活をやる気にもならない。授業が終わつたら、まつすぐに家路につく。

最近暇だ。キュアグラスとして戦つ日もめっきり無くなり、暇を持つ余している。まあ、平和が何よりだが。

数日後の日曜日、私は家で遅寝している。たまにはこんな日があるのもいいだろ？

ピンポーン！ ピンポーン！

誰よ、日曜日からうるさいな。

「秋香さんいますか？一緒に遊びに行くんですけど。」

・・・・本当にうるさい奴が来た。

うるさい奴"ラブに付き添われ、私は無理やり近くのショッピングモールに行かされた。ラブが言つには私を紹介したいと言つ。まつたく……。

「お待たせ皆、連れて來たよ！」

そこにいたのは私と同年代であろう子たちが大勢いた。揃いも揃つてこちらを凝視している。にらみ付ける奴もいたが。

「ほり秋香さん、皆にじご挨拶。」

渋々挨拶する。

「・・・・秋香。芝草秋香よ。」

そしたら他の子たちが一齊に名前を言つてきた。はつきり言つて耳障りだ。

「秋香さんもプリキュアだつて聞いたんですけど、本当なんですか？」

活発そうな金髪の子が聞いてきた。さつき・・・・なぎれ・・とか言つていた子だ。

「キュアグラス。無限の生命の証。」

「どうして無限の生命が雑草なんですか？」

「知りたきや自分で実際に草を見て考えろ。」

「…………ムツ。」

「た……多分、雑草は抜いても抜いても生えてくるから無限の生命……なんじやないでしょうか。」

近くにいたつぼみとか言う子がフォローする。ふうん、勘がいいのね。

「勘がいいわね、あんた。」

「草の事はあまりわかりませんが、花と同じように、草もまたひとつ生命ですから。」

ラブが言つには、このつぼみはキュアプロセサムといつプロキュアになるらしい。桜花が、なるほど覚えておいた。

「つぼみ、何かこの人陰気臭いね。」

「え……えりか!? 何て事を言つんですか!—!」

「だあーって、顔は笑っていないし、睨むような目つきだし、口は悪いし。ゆうさんより性格硬そうだなあって。」

「バキイツ!—!—!」

その刹那、私はえりかを殴り飛ばしていた。瞬間、胸倉を掴んだ。

「チビスケのくせによくもまあぬけぬけと。少しば自分の立場を考

えろーーー！」

「チ・・・・・チビスケですつてえ・・・・・！？！？！」

「チビスケだらうが。その背の低さが何よりの証拠だ。」

ポイツ ドサツ

私はえりかを放した。えりかは私を涙目で睨んでいたが、つぼみがそれを何とか抑えている。

「てんで話にならない。帰らせてもらひわ。」

さつさと私は帰ることにした。ところがそつは問屋が卸さなかつた。今まで彼女たちが倒してきた勢力の残党がモールを襲つたのだ。木シイナーと・・・・・言つたか。彼女たちはプリキュアに変身し、戦いを始める。私も成り行きでキュアグラスに変身した。

ボコッビシッドコッ・・・

プリキュアたちが束になつてかかつても残党にはダメージが与えられないみたいだ。見てられないなあ。

「お前達は下がつてろ。こいつは私が片付ける。」

「で・・・・でもグラス一人じゃ。」

「私が片付けると言つたんだ。邪魔をするな、そこをビナツーーー！」

私は戦っていたプリキュアたちを敵から離れた場所に次々に投げ飛ばした。

「いったああ・・・・・・！」

投げ飛ばされたから相当痛いだろう。しかし私にはお構いなし。

「ホシイナーだつたかしら？お前の相手はこの私だ。」

私は単独で挑んだ。こんな雑魚には私一人で十分だ。

「ハアアツツ！！」

相当相手を弱らせただろう。敵の攻勢が大分弱くなつた。

「店じまいだ。」

私は最後の締めに入つた。

『地上に生える無数の草の魂よ。奴にからみつき、息の根を止めよ！』

グラス・ロッドが変形し、無数の棘が生えた荆のつるとなつた。ホシイナーに向かつて放ち、全体をぐるぐる巻きにする。

『プリキュア・グラス・バージュ！…！』

つるはホシイナーの体を締め付け始めた。どんどん奴の体は締め付けられ、最後はブシュッと音を立てて四肢がばらばらになった。

戦いを終え、元の姿に戻る。これ以上構つてられない、帰ろう。

「秋香さん…」

戦闘中にキュアドリームと名乗っていたのぞみ・・・が聞いてきた。

「さつきの戦い、どうして私たちを投げ飛ばしたんですか！？」

・・・・・・・・

「それにあんじわじわと痛めつけて倒すなんて。何とも思わないんですか？」

・・・・・・・・

「どうして一人で戦おうとするんですか！？答えてください！…！」

「自分で考える、この能天気が。」

そう言つと、私は立ち去つた。他の連中は黙つて見るしかなかつた。

「な・・・何なのよあいつ、感じ悪過ぎよー。」

「あの人には血も涙も無いのかなあ。」

「これ以上関わるのはやめたほうがいいかもね。」

「・・・・・あの人、どうして関わりたがらないんだろう。」

何だか遠くで聞こえる。大方私への不満だろう。勝手に言つていろ、どれ一つとっても褒め言葉だ。私はその程度の人間なのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5548z/>

キュアグラス ~ただ雑草のように~

2011年12月29日20時52分発行